

播磨ヒストリア

播磨町の歴史をひも解き、その時代にタイムスリップして、当時の出来事をエピソードを交えながら紹介します。

播磨町郷土資料館 館長補佐 宮柳 靖
☎079(435)5000



▲あごなし地蔵

エピソード六

善福寺の秘仏「あごなし地蔵」

播磨町大中に曹洞宗のお寺、大澤山善福寺があります。お寺は、村堂の阿弥陀堂を寺院として昇格させたものですが、奉行所に申請したのは、新井の工事が始まった明暦元(1655)年のことです。翌年許可されたので350年余りの歴史を有するお寺です。

お寺に「あごなし地蔵」が安置されていますが、あまり知られていません。このユニークな名前のお地蔵さんは、小野篁の作と伝えられ、お寺の秘仏(正式には「あごなし地蔵尊」)です。篁は、平安時代初めの政治家・学者で、歌人としても名高い人です。遣唐使船に副使として乗ることになっていましたが、大使と意見が合わず乗船しなかったり批判的な歌を詠んだりしたこともあって、隠岐の島(島根県)へ流されました。

「あごなし地蔵」のいわれを記した古文書が善福寺に残っています。それによると、島では、阿古という農夫が、篁の身の回りの世話をしますが、阿古は歯の病で大そう苦しんでいました。篁は、その姿を見て木像のお地蔵さんを二体作って阿古に与えました。阿古は、「早く痛みがなくなります

ように」と毎日お願いし、ときには一日に二度三度とお祈りしたところ、痛みが消えて治ったそうです。篁は、1年余りで都へ帰りますが、別れを惜しむ阿古に、自分の形見としてもう一体を作り島を離れました。さらに、阿古が百歳になった時、お堂を造り三体のお地蔵さんを安置したということです。

歯の痛みを治す「阿古なおし地蔵」として祀られ、島民に信仰されていましたが、「阿古なおし」がなまっていつしか「あごなし地蔵」と呼ばれるようになりました。

明治の初め、仏像や寺院を壊す廃仏運動が起こり、あごなし地蔵も危険にさらされますが、三体は難を逃れ、一体は隠岐に残り、もう一体は摂津国の東光院(大阪府豊中市)に安置され、残りの一体がこの善福寺の地蔵だったのです。

お寺には、明治5(1872)年8月7日付けの隠岐国伴桂寺最後の住職、祖芳大和尚にあてた「あごなし地蔵を末代まで大切に」と記した誓約証(同じものを二通作って控えとしたものか)が残っています。